

行為のフレームに基づく「目」、「耳」、「鼻」の意味拡張

—知覚行為から高次認識行為へ—

有 蘭 智 美

要 旨

本稿は、知覚器官を表す三つの語（「目」、「耳」、「鼻」）の意味の拡張プロセスを分析し、これら三語が他の身体部位詞と同様、行為のフレームに基づくメトニミーによって、知覚行為に関する複数の意味に拡張していることを示す。また、これら三語は、知覚に関わる意味だけでなく高次認識に関わる意味も表すことを実例とともに示す。さらに、それらの拡張における意味の多様性には、各知覚器官の持つ特徴が反映していることを示していく。

キーワード：身体部位詞、フレーム、メトニミー、メタファー、シネクドキー

1. はじめに

身体部位詞は、身体部分としての意味を表すのはもちろんのこと、その本来の意味からメタファーやメトニミーといった認知プロセスに基づき様々な意味に拡張している。例えば、「口」は本来身体の一部としての意味を表すが、「口が悪い」では「口」は〈話し方〉の意味を、「口を減らす」では〈摂食する人〉の意味を、「口を合わせる」では〈意見〉の意味をそれぞれ担っている¹⁾。この、身体部位の本来の意味から別の意味への拡張には主に、比喩の生成プロセスとしてのメトニミー（換喩）が関与している（Kövecses and Radden 1998; 田中 2002a; 有蘭 2009）。特に有蘭（2009）は、日常生活において我々にとって際立ちの高い身体部位が、「行為のフレーム」に基づくメトニミーによって、ある程度体系的にそれらの意味を拡張させていることを示している。そこで本稿は、本来は知覚器官を表す「目」、「耳」、「鼻」の意味の拡張プロセスを分析し、これら三語が他の身体部位詞と同様、行為のフレームに基づくメトニミーによって複数の意味に拡張していることを示す。また、田中（2001, 2002b）は、知覚器官を表す「目」が、知覚の意味だけでなく高次認識に関わる意味を表すことを論じており、本稿では、このことが目だけでなく他の知覚器官を表す二語においても見られることを示す。さらに、これら三語の拡張における方向性と拡張した意味の多さには、各知覚器官の持つ特徴が反映していることを示し、本来の身体部位としての意味が拡張した意味に制約を与えている可能性を示していく。

2. 目, 耳, 鼻の意味の拡張基盤

語は、経験、習慣、認識などによって構成されるフレームという背景的知識によって理解される (Fillmore 1982)。本節では、Kövecses and Radden (1998) を参考に、身体部位詞の意味拡張の主軸をなすものとして、「行為のフレーム」を設定し、それを基に「目」、「耳」、「鼻」の意味の拡張について考察する。

2.1. action ICMに基づくメトニミー

Kövecses and Radden (1998: 39) は、メトニミーの伝統的定義に対する Lakoff and Johnson (1980), Lakoff (1987), Lakoff and Turner (1989), Langacker (1993), Croft (1993), Gibbs (1994) などの見解を踏まえ、メトニミーを「同じ領域か ICM 内で、概念的実体 (媒体; vehicle) が別の概念的実体 (目標; target) へと心的アクセスを与える認知プロセスである」と定義している²⁾。そして、我々が外界に対する知識を、理想化された知識の総体である ICM によって組織していることを前提として、メトニミーを産み出す概念関係を「メトニミー産出関係」とし、それについて詳細に分析している。なお、メトニミーは我々が ICM を持つ全ての場面で生じるが、顔における鼻と口の関係など、隣接していてもメトニミーにならないことがあり、従って、メトニミー産出関係は、二つの実体間の単なる空間的な隣接関係ではなく、概念的関係であると主張している。

ここで、本稿で参考にする action ICM と perception ICM について紹介する³⁾。Kövecses and Radden (1998: 54-55) は、行為には様々な要素が関わるとして、行為に関わる多様な参加者を含む action ICM を設定している。そこでは、〈行為〉、〈道具〉、行為の〈対象物〉、〈行為者〉、〈結果〉などは全て、action ICM の参加者 (部分) であり、例えば〈行為〉と〈道具〉、〈行為〉とその行為に関わる〈対象〉、〈行為〉とその行為の〈結果〉などの間には特別な関係があるとして、action ICM におけるこれらの関係は以下のような特定のメトニミーを生じさせると主張している。

- (1) a. **INSTRUMENT FOR ACTION** (to *shampoo* one's hair)
- b. **AGENT FOR ACTION** (to *author* a book)
- c. **ACTION FOR AGENT** (*snitch*)
- d. **OBJECT INVOLVED IN AN ACTION FOR THE ACTION** (to *blanket* the bed)
- e. **ACTION FOR OBJECT INVOLVED IN THE ACTION** (Give me one *bite*)
- f. **RESULT FOR ACTION** (a *screw-up*)
- g. **ACTION FOR RESULT** (a *deep cut*)
- h. **MEANS FOR ACTION** (He *sneezed* the tissue off the table)
- i. **MANNER OF ACTION FOR THE ACTION** (She *tiptoed* to her bed)
- j. **TIME PERIOD OF ACTION FOR THE ACTION** (to *summer* in Paris)
- k. **DESTINATION FOR MOTION** (to *porch* the newspaper)
- l. **TIME OF MOTION FOR AN ENTITY INVOLVED IN THE MOTION** (The *8:40* just arrived.)

これらは全て、action ICMにおける参与者、つまり、同一のICMの部分同士の関係において成り立つメトニミーである。例えば、(1a)のINSTRUMENT FOR ACTIONの例では、本来、洗髪行為の〈道具〉を表す名詞の*shampoo*が、それを用いて行う〈洗髪行為〉を表す動詞として用いられており、〈道具〉を表す形式によってそれと関係する〈行為〉を表している。

また、Kövecses and Radden (1998: 55-56)は、知覚行為に関わる perception ICMも action ICMと同様に提案しており、これについて、「知覚は我々の認知的経験において顕著な働きをするため、perception ICMを単独で設定することは妥当であろう。しかし、意図的な知覚は本来動詞であるため、action ICMで見られるのと同じメトニミーがここでも見られる」と述べている。例えば、*eye*が動詞として用いられる *to eye someone* は、perception ICMに基づく INSTRUMENT OF PERCEPTION FOR THE PERCEPTION というメトニミーの例だが、これは (1a) の INSTRUMENT FOR ACTION とその例 *to shampoo one's hair* に対応している。つまり、道具である *shampoo* によってその行為を表すのと同様、〈見る〉という行為の道具である *eye* が、その行為自体を表すために用いられている。また、*She squinted through the mailbox* (〈彼女は郵便ポストを一瞥した〉) は、perception ICMに基づく MANNER OF PERCEPTION FOR THE PERCEPTION というメトニミーによって生じるものだが、これは (1i) の MANNER OF ACTION FOR THE ACTION によって生じる *She tiptoed to her bed* に対応する。*She tiptoed to her bed* の *tiptoe* は、本来〈忍び足〉という行為の様態を表す語だが、この例では〈忍び足で歩く〉という行為を表す動詞として用いられており、これと同様に、perception ICMに基づく *She squinted through the mailbox* の *squint* は、本来〈横目・流し目〉という、知覚の様態を表す語だが、この例では〈一瞥する〉という行為を表す動詞として用いられている。

Kövecses and Radden (1998) は、認識経験に対して知覚は顕著な役割を担うということと、非意図的な知覚が生じさせる PERCEPTION FOR THING PERCEIVED (例：〈見られるもの〉としての *a gorgeous sight*) とその逆のメトニミーである THING PERCEIVED FOR THE PERCEPTION (例：〈ひざに痛みがある〉という意味での *There goes my knee.*) により、perception ICM を action ICM とは別に設定している。もちろん、Kövecses and Radden が主張するように、意図的な知覚と非意図的な知覚の間には相違があるだろう。しかし、非意図的な知覚が産み出すメトニミーの PERCEPTION FOR THING PERCEIVED の例 *a gorgeous sight* において、〈知覚〉によって〈知覚されるもの〉が表されるのは、action ICM における ACTION FOR OBJECT INVOLVED IN THE ACTION の例、*Give me one bite* が、〈噛むこと〉によって〈噛まれるもの〉を表しているのに対応していると考えられ、また同様に、その逆の THING PERCEIVED FOR THE PERCEPTION も、action ICM における OBJECT INVOLVED IN AN ACTION FOR THE ACTION と対応するものと考えられる。また、本稿で対象とする目、耳、鼻などは全て身体部位であり、これらの身体部位詞の意味は、知覚に関わる以外の身体部位詞の意味と同様の基盤に基づく拡張が認められる(有菌 2009)。従って本稿では、身体部位詞の意味拡張の基盤として、知覚も広く行為に含む「行為のフレーム」を設定し、フレーム内の参与者である〈道具〉としての身体部位が同一フレーム内の他の要素を表すというメトニミーを、身体部位詞の意味拡張過程の

主軸とし、知覚器官を表す語である「目」、「耳」、「鼻」の意味が、この行為のフレームに基づいて、いかにして拡張しているかということをも明らかにしていく。

2.2. 行為のフレームに基づくメトニミー

前述の通り、行為には、その行為をする人、行為に用いる道具、行為の対象、行為に要求される方法、その行為を順調に行うための技術や能力、そして、その行為の結果産み出される生産物など、様々な要素が関わる。行為に関わるこれらの諸要素は、〈行為〉に関わるひとまとまりの知識構造、つまり、下図に示されるような「行為のフレーム」を形成している。

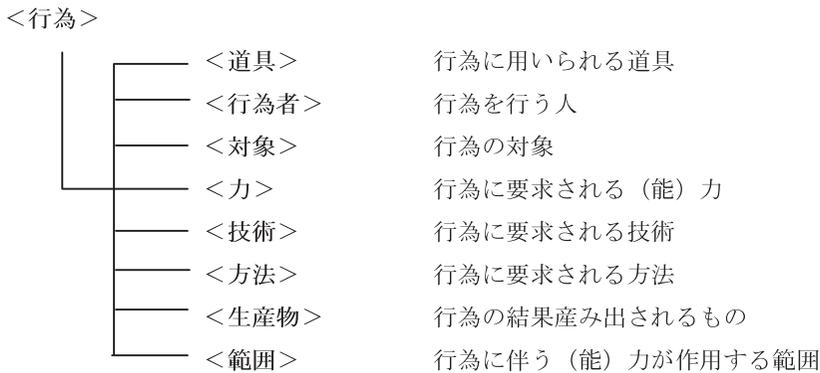


図1. 行為のフレームにおける諸要素

多くの身体部位詞が、身体の部分としての意味ではなく別の意味を表す時、この行為のフレームに基づいて意味が拡張している。我々は、何かを掴む時には「手で」掴み、何かを見る時には「目で」見、何かを聞く時には「耳で」聞き、歩く時には「足で」歩く、というように、各身体部位は様々な行為をする際の道具となる。そしてこの見立てにより、〈道具〉としての身体部位を表す語は、行為のフレームにおいて関連付けられる他の要素を表すのに用いられる。この、フレーム内のある要素を表す形式で、同一フレーム内の別の要素を表すというプロセスは、メトニミーによる意味の拡張である。

ここで、なぜ、身体部位、つまり行為のフレームにおける〈道具〉が、メトニミーの媒体として優先的に選択されるのかという問題について考えてみよう。Langacker (1993, 1999) は、メトニミーの基盤として、参照点能力 (reference-point ability) を挙げている。参照点能力とは、ある人 (概念化者) が、ある目標となる対象を把握あるいは指示する際に、その対象を直接捉えるのに何らかの困難を伴う場合に、別のより把握しやすいものを参照点として活用し、目標となる対象を捉えるという認知能力である。そしてメトニミーにおいては、メトニミー表現によって本来指示される事物は、実際に指示される事物に心的アクセスを与える参照点として機能するとし、その際には、human > non-human, whole > part といった認知的際立ちに関する原理が保持されると主張している (Langacker 1999)。また、Kövecses and Radden (1998) はこの主張を基に、

ICMの要素のうちどれがメトニミーの媒体として選択されるのかという問題を詳細に考察している。身体部位は、これらの研究で論じられている認知的際立ちの原理の多くに、問題なくあてはまる。つまり、Kövecses and Radden (1998) の認知的原理にあてはめて考えると、身体部位は、我々人間の身体の一部であり (human over non-human)、また、身体部位は見たり触れたりすることができるという点で我々にとって具体的な存在である (concrete over abstract)。また、身体部位は、外界のものを知覚したり、外界のものと接触したりするという点で、様々な事態に対して機能的に働く (functional over non-functional)。さらに、外界における様々な事態に対して機能的に働くということは、外界との関与という観点から見ても、身体部位が顕著な存在であるということである (interactional over non-interactional)。つまり、行為のフレームにおいて、その一要素である〈道具〉としての身体部位は、我々にとって最も認知的際立ちが高いのである。それゆえ、〈道具〉としての身体部位は優先的に参照点となりえ、同一フレーム内の別の要素へと心的アクセスを与えることが可能になり、〈道具〉を表す形式によってフレーム内の別の要素を表すというメトニミーが成立するのである⁴⁾。

次節では、「目」、「耳」、「鼻」の意味を、図1の各要素の意味へと拡張している例を挙げながら、順に詳述していく。

2.3. 知覚行為のフレームに基づく「目」、「耳」、「鼻」の意味拡張

目、耳、鼻の三つの部位は、知覚行為の器官として、我々にとって際立ちの高い部位であり、それゆえ、身体部位における知覚器官の意味以外の意味へと拡張している。「口」が典型行為として食べること (〈摂食行為〉) と話すこと (〈言語行為〉) を喚起するのと同様、これら三語の使用はそれぞれ、〈視覚行為〉、〈聴覚行為〉、〈嗅覚行為〉を喚起し、これらの典型行為へと特定された行為のフレームを基盤としてその意味が拡張する。まず、「目」が表す視覚行為のフレームの諸要素を記した下図2をもとに、「目」の意味拡張から考察していく。

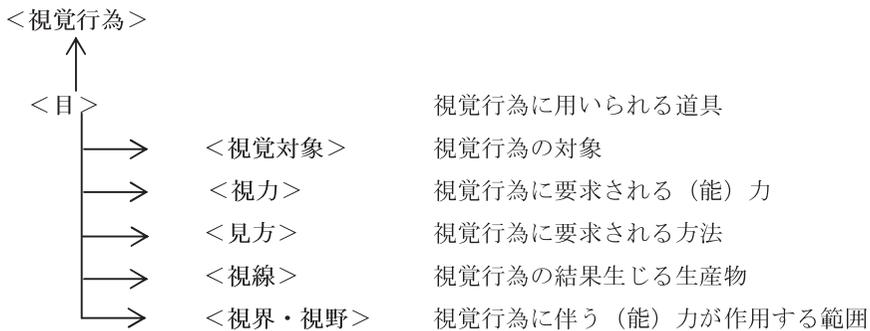


図2. 視覚行為のフレームにおける諸要素の意味拡張

以下で、実例を基にこれらの意味の拡張を検証していく。

- (2) 二人とも中年のアメリカ人、やはり商人だということは一目で判ったが、同時に彼等

は何となく人の注意——好奇心を牽くところを持っていた。(宮本百合子『三鞭酒』青空文庫)

- (3) 加齢現象を考えると、大きな変化の表れる「見た目」を1つの指標とし、研究、検討することを目的として活動を進めていく。(http://www.anti-aging.gr.jp/mitame/)
- (4) 目を酷使するようなコトしかしてないにも関わらず、目がいいというのはちょっと不安です。(http://desireforwealth.com/diary/diary200108.shtml)
- (5) まだ授業のはじまらない前の、何となくざわめき立った教室の中で、私は隣の意地悪い生徒にわざとしかめ面なぞをされながら、半ば開いた硝子窓ごしに、廊下に立ったままの私の母の方へ、ときどき救いを求めるような目で見た。(堀辰夫『幼年時代』青空文庫)
- (6) 夫はチョッキへ腕を通しながら、鏡の中のたね子へ目を移した。(芥川龍之介『たね子の憂鬱』青空文庫)
- (7) そういう坂道の中途まで来てふと足を止めた瞬間、ひょいとそんな荒れ果てた庭園が目に入るので、人はますますその空家を何だか夢の中でも見ているような気がするのである。(堀辰夫『あいびき』青空文庫)

(2) の「一目」という複合語では、〈少し〉という意味を表す「一」と、〈見ること〉を表す「目」が連結して、複合語全体で〈ちょっと見ること〉を表している。つまり、この例の「目」は、視覚行為のフレームにおける〈道具〉を表す形式によって、〈視覚行為〉そのものを表しているといえる。また、(3) の「見た目」の「目」は、視覚行為の道具を表す形式によって、その行為の〈対象 (の外見)〉を表している。

(4) の「目がいい」では、〈視力〉を表す「目」と〈優れている〉さまを表す「いい」が連結して、句全体で〈視力が優れている〉さまを表している。この場合、「目」の表す〈視力〉というのは、視覚行為を成しうる力、つまり〈能力〉であり、本来〈道具〉を表す形式「目」によって、視覚行為に要求される〈視力〉を表している。

田中 (2002b: 165) は、〈視覚器官〉が、「物体面、機能面という異なる側面を含んでおり、どの側面が顕著であるかによって意味の微妙な差が出てくる」と述べ、「目が見える/目がいい」などの「目」は〈視覚器官〉という概念のうち特に機能面の顕著な用法であると説明しており、特にその器官と、それが発揮する〈能力〉を区別せず、〈視線〉と〈視界〉のみを〈視覚器官〉から拡張した概念として認めている。もちろん、目は眼球や眼瞼などからなり、顔面の上部に位置し、楕円形をした、視覚機能を司る器官であり、視力はその器官に本来備わっているものであることを考えると、「目がいい」の「目」を〈視力〉を表しているとするか、視力もその一部として含めた〈視覚器官〉を表しているとするかは程度問題であるかもしれない。しかし、「目がいい」が〈視覚器官〉の機能面の顕著な用法と考えるのであれば、それはまさに、〈視覚器官〉における機能面の焦点化であると言い換えられ、この焦点化はメトニミーの特徴である⁵⁾。つまり、当該の身体部位が発揮する能力は、もちろんその部位に備わる機能的側面の顕在化であり、そして、この身体部位と能力との関係は特に知覚器官において密接であるのだが、その部位が何らかの行

為の道具とみなされる時にこそ、その機能的側面はアクセスされるものとなりうる（つまり、メトニミーの目標となりうる）のである。従って本稿では、視覚行為の道具としての〈視覚器官〉と、その行為に要する能力としての〈視力〉を区別し、後者の意味は前者の意味からメトニミーによって得られるものとし、後に見る「耳」の表す〈聴力〉と「鼻」の表す〈嗅覚力〉の意味についてもこの分析を適用させる。また、そうすることにより、〈道具〉とそれを扱う〈（能）力〉という、別個のものでありながら関連する要素を含む行為のフレームに基づく意味の拡張として、他の身体部位の意味拡張との整合性が得られることになる。

次に、(5)の「～目で見ると」では、「目」は、視覚行為の道具を表す形式で、その行為に要求される方法（つまり〈見方〉）を表している⁶⁾。従って、(5)は、〈見方〉を表す「目」と、「見ると」が連結して、句全体で〈（特定の）見方で見ると〉ことを表しており、点線部分も含めると、〈救いを求めるような見方で見ると〉ことを表している。

また、(6)の「目を移す」では、「目」は〈視線〉の意味を担い、「移す」と連結して、句全体で〈視線を移動させる〉ことを表す。この〈視線〉は〈視覚行為〉の結果生じるものであるもので、行為のフレームにおける〈生産物〉にあたる。従ってこの表現では、本来〈道具〉を表す形式「目」によって、視覚行為の結果生じる〈生産物〉（〈視線〉）を表している。

さらに、(7)の「目に入る」では、〈視界〉を表す「目」と、〈（対象が）外から中に移ると〉ことを表す「入る」が連結して〈視界の中に移ると〉という意味を表している。「目」の表す〈視界〉は、行為のフレームにおける〈範囲〉である。従ってこの例では、本来視覚行為の〈道具〉を表す形式「目」によって、視力の及ぶ範囲（〈視界〉）を表しているといえる⁷⁾。

次に、「耳」の意味の拡張について見てみよう。「耳」が表す意味は、聴覚行為のフレームにおける以下の要素である。

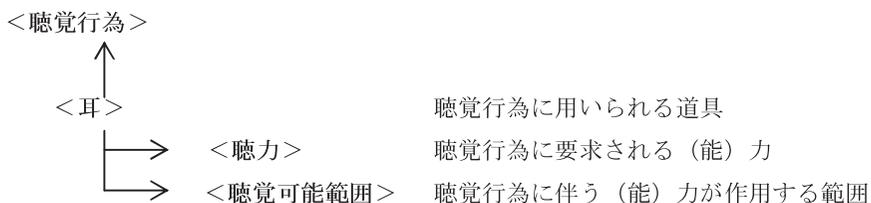


図3. 聴覚行為のフレームにおける諸要素の意味拡張

以下の慣用的連結句の「耳」は、身体部位の〈耳〉ではなく、拡張した意味を表している。

- (8) また、耳が早い方はご存知とは思いますが、CS5.5ではPDF/X-4書き出し時の設定が変更されています。詳しくは「大日本スクリーン製造 出力の手引きWeb」を御覧ください。(http://support.pubmix.jp/support/archives/974)
- (9) 家人はたまたま耳がいいので、私が気づかない小さな音も聞きつける、耳元でそんな大きな声で話さないでと言う。(http://tomatis.ear-voice.org/history/yasui/yasui01)
- (10) どんなピアノの強打のなかでも、その響きとサウンドしながら、はっきりとしたエッ

ジをもって耳に立つ声と言葉。

(<http://news-ombaroque.blogspot.jp/2012/06/soloanarchy-egoist.html>)

(8) の「耳が早い」では、「耳」自体は〈聞くこと〉という聴覚行為の意味を担っており、〈(ある動作を)完了するのに要する時間が短い〉さまを表す「早い」と連結して、句全体で〈(うわさなどを)聞きつけるのが早い〉さまを表している。この例では、聴覚行為に用いられる〈道具〉を表す形式「耳」によって、〈聴覚行為〉自体の意味を表していると考えられる。

次に、(9) の「耳がいい」では、「耳」は〈聴力〉を表し、〈優れている〉さまを表す「いい」と連結して、句全体で〈聴力が優れている〉さまを表している。この例では、聴覚行為に用いられる〈道具〉を表す形式「耳」によって、その行為に要求される〈能力〉を表している。

さらに、(10) の「耳に立つ」では、聴覚行為に用いられる〈道具〉を表す形式によって、〈聴力の及ぶ範囲〉を表し、およそ〈現れる〉という意味を表す「立つ」と連結して、句全体で〈聴力の及ぶ範囲に現れる〉(つまり〈聞こえる〉)ことを表している。

次に、慣用的連結句における「鼻」が表す意味を見てみよう。



図4. 嗅覚行為のフレームにおける要素の意味拡張

以下の例の「鼻」は、身体部位の〈鼻〉ではなく、拡張した意味を表している。

(11) 私は鼻炎のくせに鼻がいい。(http://ripen.jugem.cc/?eid=464)

「鼻」は嗅覚を司る器官であるため、この語は嗅覚行為のフレームを喚起する。(11) の「鼻がいい」では、「鼻」は〈嗅覚力〉を表し、〈優れている〉さまを表す「いい」と連結して、句全体で〈嗅覚力が優れている〉さまを表している。従ってこの「鼻」は、嗅覚行為に用いられる〈道具〉を表す形式「鼻」によって、その行為に要求される〈能力〉(〈嗅覚力〉)を表しているといえる。この例では、「鼻炎のくせに」という部分から分かるように、〈嗅覚器官〉自体は正常な状態ではない一方で、嗅覚行為に要求される〈能力〉は優れていることを表している。つまり、身体部位自体と能力は関連しながらも、必ずしも一致するものではなく、その〈能力〉は、特に嗅覚行為に関連する時にのみアクセスされる。従ってここでも、田中(2002b)とは異なり、〈知覚能力〉の意味は〈知覚器官〉の意味からメトニミーによって生じるものとして分析する。

以上で見てきた「目」、「耳」、「鼻」は、知覚行為の道具としての身体部位の意味から、知覚行為に関わる他の諸要素を表す意味へと拡張しており、これは、他の身体部位詞と同様、典型行為のフレームに基づくメトニミーによるものである。しかし、これら三語は、外的な対象を認識する単なる知覚行為だけでなく、抽象化や総合的判断などの、より高度な認識作用である「高次認識行為」にも関わる。以下では、「目」、「耳」、「鼻」が、知覚だけでなく高次認識行為に関わる

意味をも表すことを実例を挙げて確認し、それぞれの語において、知覚行為のフレームの諸要素と、高次認識行為のフレームの諸要素に対応関係があることを示していく。

2.4. 知覚行為から高次認識行為へのメタファー・シネクドキーによる拡張

田中（2002b）は、視覚に関わる動詞の「みる」、「みえる」、名詞の「目」を取りあげ、それらが表しうる知覚と高次認識に関わる意味について論じている。ここで、田中（2002b: 155）の、「知覚」と「高次認識」についての定義を確認する。

知覚・知覚領域：知覚器官を通して事物の存在を知り、それを犬なら犬と即座にカテゴリー化するまでの、無意識でも可能なほどにルーティーン化されたレベルの認知作用（視覚はその一つ）・それに関わる意味の領域

高次認識・高次認識領域：高度な抽象化と分析を通して総合的な判断・評価を行うと考えられる上位レベルの認知作用・それに関わる意味の領域

田中(2002b: 155-156)は、視覚に関わる「みる」、「みえる」、「目」の意味が、メタファー、メトニミー、シネクドキーによって高次認識の意味に拡張し、それらが形成する視覚表現の意味のネットワークについて論じ、この意味のネットワークは、視覚と高次認識とを連続的に捉える我々の文化モデルを示していると述べている。

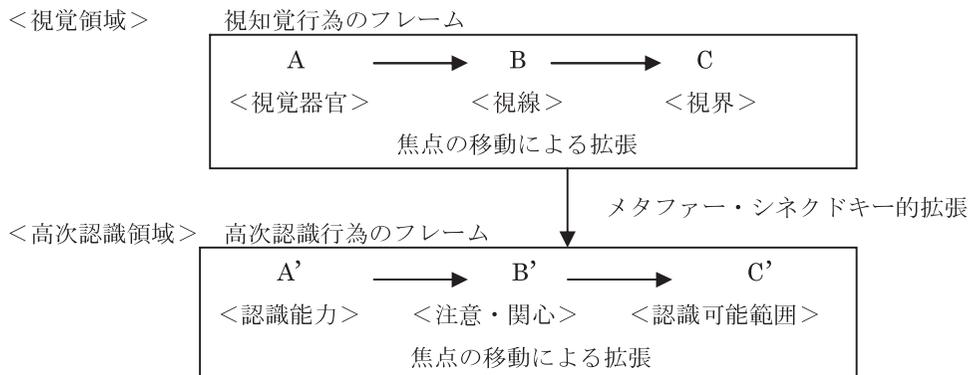


図5. 「目」の高次認識への拡張（田中 2002b: 167）

また田中（2002b: 160-161）は、視覚領域から高次認識領域への拡張を、「メタファー・シネクドキー的拡張」としている。その理由は、空間的な「先（前方）をみる」から時間的な「先（未来）をみる」への拡張は、異なる意味領域間の類似性に基づくメタファーであるが、その一方で、知覚作用も高次認識作用も含めた認知作用一般という上位レベルの意味領域を考えることもでき、「世界/事態/ものごと/状況」をみる」のような例の場合には、視覚領域と高次認識領域という切り離された二つの領域間の転用というよりは、上下関係に基づくシネクドキー的な意味の伸縮運動と見たほうがよいためである。このような、典型的なメタファーと考えられるケースと、上下関係に基づくシネクドキーと考えられるケースの存在から、田中（2002b）は、視覚領域から

高次認識領域への拡張を、メタファー・シネクドキー的拡張と呼ぶのである。

また、それぞれの領域を見てみると、図5の上段の、視覚行為のフレームにおけるメトニミー的多義ネットワークは、ほぼそのまま下段の高次認識領域へと拡張している。つまり、図5の上段(A)の〈視覚器官〉(「目が見える」)は、視知覚行為のフレームにおける構成要素間の焦点移動によって、(B)の〈視覚〉(「目を注ぐ」)及び(C)の〈視界〉(「目に入る」)へと拡張しており、それと並行して、図5の下段の高次認識領域では、(A')の〈高次認識能力〉(「お目が高い」)は、(B')の〈注意・関心〉(「目が離せない」)及び(C')の〈認識可能範囲〉(「広い目を持つ」)へと拡張しており、(A)から(A')、(B)から(B')、(C)から(C')にはそれぞれ、メタファー・シネクドキー的拡張が関わっている。田中(2002b: 162)はこれを、「この視覚領域における多義ネットワークの各節点は、(中略)高次認識領域の多義のネットワーク上に対応する節点を見出す。すなわち視覚領域から高次認識領域への拡張は、フレームぐるみで生じている」と述べている。

本稿は、田中(2002b)の上述の議論を基に、「目」の意味拡張だけでなく、「目」と同様に知覚行為に関わる「耳」と「鼻」の意味拡張についても考察し、それらを整理していく。

まず、「目」の、〈視覚行為〉から〈高次認識行為〉への拡張を見てみよう。

- (12) 個人事業主さんといっても“山あり谷あり”を歩んできた人は考え方が全然違いますね。谷を味わった方は、それなりの考え方が身につき、それがいつの間にか自信に繋がっています。それだけ事業に対する目が肥え、課題も明確になっているんでしょうね。(http://kouyan.hamazo.tv/e804908.html)
- (13) 「ここでもう一つの他の事実を、そこまで進んだ新しい目で見ます。……つまり、水呑場にあった安全灯ですが、あなたは、その安全灯を、密閉後抜け出した峯吉が、人殺しの邪魔になるから置いて行くと解釈されたでしょう。しかしいま私は、その安全灯を、発火当時坑内にいなかった峯吉の所在を示すものと解釈します。峯吉は、水呑場へ行ってたんです」(大阪圭吉『坑鬼』青空文庫)
- (14) 家族や身近な人のこころの変化に目を配ろう
(http://www.pref.kagawa.lg.jp/kenkosomu/health/pdf/chapter4b-2.pdf)
- (15) たそがれ時のバーで往年の世界チャンピオンが一人で酒を飲んでいる。あのとときの若々しいスピリットも引き締まった肉体も、もはや失われてしまった。そして彼の過去の栄光を知るものもなかった。世界を制覇した時点で、彼の時は止まった。時代の流れも、次々に自分を追い越していった人々の姿も彼の目には入らなかった。
(http://sanggar-pamungkas.cocolog-nifty.com/blog/2008/11/post-d904.html)

(12)の「目が肥える」の「目」は、(4)の「目がいい」の「目」のように、単に視覚行為のフレームにおける〈能力〉(〈視力〉)を表しているのではない。波線部分は認知作用の対象を示しているが、この対象は、外界に存在する物体や景色といった具体的存在ではなく、一定の計画や目標などの要素を含む抽象的存在である。この時行われる認知作用は、それらの計画や目標の分析を通して総合的な判断・評価を行う、高次認識行為である。従って、(12)の「目」は〈鑑識力・判断力〉

を表し、およそ〈土地や生物の体格が豊かになる〉という意味から、物理的豊かさと能力の豊かさの類似性に基づくメタファーによって〈能力が豊かになる〉という意味に拡張した「肥える」と連結して、句全体で〈鑑識力・判断力が増す〉という意味を表している。この例では、高次認識行為の〈道具〉を表す形式「目」を用いて、その行為に要求される〈能力〉(つまり〈鑑識力・判断力〉)を表しているといえる。

(13)の「～目で見える」の「目」も、(5)の「～目で見える」の「目」のように、単に視覚行為の〈方法〉(〈見方〉)を表しているのではない。(13)の波線部分の「もう一つの事実」とは「安全燈が水呑場にあったこと」であり、この認知対象は、実際にそこで起こっている出来事、あるいは「安全燈」という具体的存在でありながら、その一方で、そこから何らかの解釈を導くべき判断対象である。つまり(13)の「～目で見える」は、単なる視覚行為ではなく高次認識行為であり、〈高次認識の方法〉の意味を担う「目」と、〈見る〉ことから〈解釈する〉ことへと拡張した「見る」が連結し、句全体で〈(特定の)方法で解釈する〉という意味を表している⁸⁾。

また、(14)の「目を配る」の「目」も、(6)の「目を移す」の「目」のように、単に視覚行為のフレームにおける〈生産物〉(〈視線〉)を表しているのではなく、高次認識に関わる意味を表している。(13)と同様、(14)の波線部分の「こころの変化」は、具体的な認知対象ではなく、抽象的な認知対象である。従って、(14)の「目を配る」の「目」は〈注意・関心〉を表し、およそ〈ものを割り当てて渡す〉ことからメタファーによって拡張した〈抽象物を行き渡らせる〉という意味を表す「配る」と連結して、句全体で〈注意を行き渡らせる〉という意味を表している。この時「目」は、高次認識行為のフレームにおける〈道具〉を表す形式によって、その行為の結果生じる〈生産物〉(つまり、〈注意・関心〉)を表しているのである。

さらに、(15)の「目に入る」の「目」も、(12)-(14)と同様に、単に視覚行為のフレームの要素を表しているのではない。(15)の「目に入る」の「目」は、視覚行為における〈範囲〉(〈視界〉)を表しているが、(15)の「目」は、高次認識行為における〈範囲〉を表している。(15)の波線を施した「時代の流れ」や「次々に自分を追い越していった人々の姿」という認知対象は、知覚対象ではなく、関心を持って注目するという高次認識行為の対象である。従って、「目」は〈鑑識力・判断力の及ぶ範囲〉を表し、「入る」と連結して、句全体で〈鑑識力・判断力の及ぶ範囲に入る〉ことを表しており、(15)では否定語を伴っているので、〈鑑識力・判断力の及ぶ範囲に入らない〉ことを表している。つまり、(15)の「目」は、高次認識行為における〈道具〉を表す形式によって、その行為に要求される能力(鑑識力・判断力)が及ぶ〈範囲〉を表しているのである。

次の図6は、以上で見てきた「目」の視覚行為から高次認識行為への拡張を示している。なお、田中(2002b)は、視覚行為のフレームにおいては〈視覚器官〉→〈視線〉→〈視界〉という方向を、高次認識行為のフレームにおいては〈認識能力〉→〈注意・関心〉→〈認識可能範囲〉という方向を図示している(図5参照)が、そのようなフレーム内での線上の方向性を認める根拠は認められないため、知覚行為と高次認識行為のフレームの対応は田中(2002b)に従いながら、拡張については新たに図示する。なお、図6における実線の矢印はメトニミーによる拡張を、点線の矢印はメタファーまたはシネクドキーによる拡張を表している。破線の左側は、図2で示した視覚

行為のフレームの諸要素であり、右側は、そこから「メタファー・シネクドキー的拡張（田中2002b）」を通して生じる、高次認識行為のフレームの諸要素である。それぞれのフレームにおける各要素は対応しており、「視覚領域から高次認識領域への拡張はフレームぐるみで生じている」という田中（2002b: 162）の主張に沿う。

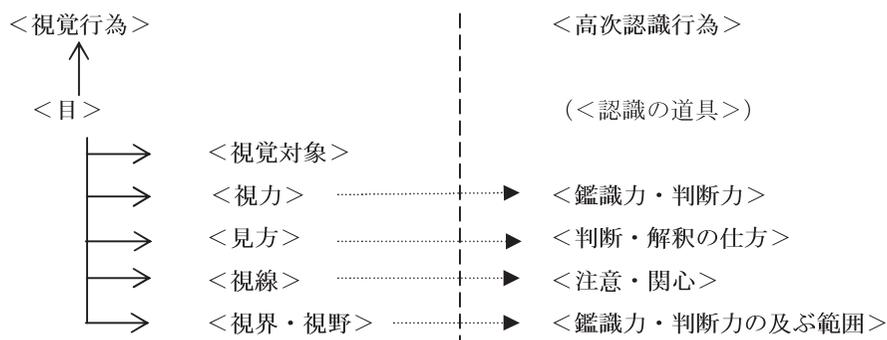


図6. 視覚行為から高次認識行為への拡張（cf. 図2）

次に、「耳」の聴覚行為から高次認識行為への拡張を見てみよう。「耳」が聴覚行為のフレームの他の要素を表すことは既に述べたが、以下の例は、「耳」が単に聴覚による知覚行為だけでなく、高次認識行為に関わる意味をも表すことを示している。

- (16) 歌がうまい人のことを「あの人、耳がいいんだろうね」なんて言うことがある。とはいえ、この場合の「耳がいい」は単純に聴力の良さとは違う気がする。[中略]「音痴とは、聴いた音にうまく声を合わせられない状態を言います。これは、インプットとアウトプットの問題で、アウトプットのヴォイストレーニングを訓練するだけでは不十分で、『聴き方』『音のとらえ方』も大切なのです」

(<http://www.zakzak.co.jp/society/domestic/news/20130427/dms1304271437003-n1.htm>)

(16) の波線部分の「音」は、単に、聴覚器官に空気の振動を通して伝わる〈音〉ではなく、拍子、節、音色、（また、歌い手がいる場合は詞やその人物の声）などに基づき、種々の形式に組み立てられたものであり、それゆえこの対象について行う認知作用は、単なる知覚行為ではなく、二重下線（音のとらえ方）にあるように、何らかの解釈が必要な高次認識行為である。従って、(16) の「耳がいい」の「耳」は、(9) の「耳がいい」の「耳」のように、単に知覚行為における〈能力〉を表しているのではなく、高次認識行為における〈鑑識力・判断力〉を表し、〈優れている〉さまを表す「いい」と連結して、句全体で〈鑑識力・判断力が優れている〉さまを表している。つまりこの例では、高次認識行為のフレームにおける〈道具〉を表す形式「耳」を用いて、その行為に要求される〈能力〉（〈鑑識力・判断力〉）を表しているといえる。この場合の高次認識行為は、単なる知覚行為ではないものの、聴覚情報に基づいて行われている。従って、この場合の「耳」は、メタファーによって別の領域の要素を表しているというよりも、認知作用一般の一種である知覚行為の要素を表す形式で、知覚器官を介して総合的判断を行うというより一般的な認知作用

を表していると考えられ、この例の「耳」が表す〈鑑識力・判断力〉の意味は、より特殊な〈聴力〉からのシネクドキーによって生じている。

また、以下の例を見てみよう。

(17) BMI22がもっとも健康的って世界保健機関が言っているのに耳を聞く事は出来ないのかな (<http://bluecheeler.exblog.jp/17924756>)

(18) 惣別して、傍輩(ぼうばい)つきあいの時、物事を大耳に聞くべし。
(<http://plaza.rakuten.co.jp/masakuni/diary/200910200000/>)

(17)の「耳を聞く」では、「耳」は〈話〉を表し、「聞く」と連結して句全体で〈話を聞く〉ことを表している⁹⁾。〈話〉もまた、単なる聴覚行為の対象ではなく、聞く者に解釈や評価をさせる高次認識行為の対象である。従って、(17)の「耳」は、高次認識行為のフレームにおいて、〈道具〉を表す形式によって、高次認識行為の〈対象〉(つまり〈話〉)を表しているのである。また、(18)の複合語の「大耳」の「耳」は、〈鑑識力・判断力の及ぶ範囲〉の意味を表していると考えられる。「大耳」は、〈聞き流すこと、気にとめないこと、また、そのさま〉を表し、「大耳に聞く」という表現は、〈細かなことに気をつけず、おおざっぱに聞き流す〉ことを表す。これは、「大目に見る」、「広い目で見ると」の「目」が、高次認識行為における〈鑑識力・判断力の及ぶ範囲〉を表しているのと同様である。

ここでの、「耳」の表す〈話〉は、視覚や触覚によって認識されるもの(文字で書かれたものや点字により示されたもの)ではなく、聴覚により認識されるものである。従って、(17)の「耳」が表す〈(高次認識行為の)対象〉としての意味は、〈(聴覚行為の)対象〉から、シネクドキーによって生じたものであると考えられる。ただし、「耳」は、聴覚行為のフレームにおいて、メトニミーによって拡張した、単なる〈(聴覚行為の)対象〉としての意味は持たない。

以上のことを踏まえて、「耳」の聴覚行為の領域から高次認識行為への拡張を図示すると、以下ようになる。

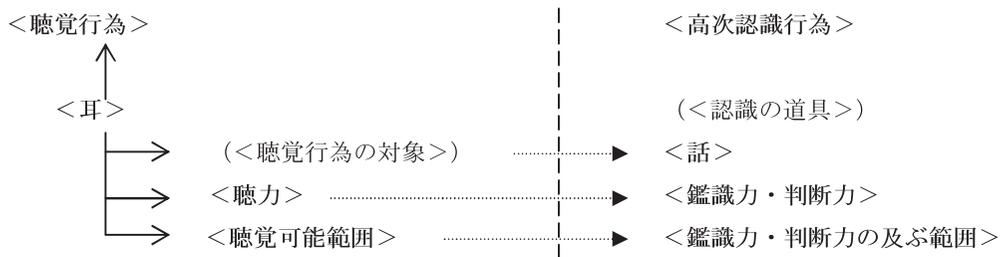


図7. 聴覚行為から高次認識行為への拡張 (cf. 図3)

破線の左側は、図3で示した聴覚行為のフレームの要素であり、右側は、そこから点線の矢印で示されるシネクドキーによって拡張した、高次認識行為のフレームの要素である。図7では、高次認識行為のフレームにおける〈道具〉から〈対象〉へのメトニミーによる拡張が見られる一方で、聴覚行為のフレームでは〈道具〉から〈対象〉への拡張は見られないため、図6の「目」の

場合とは異なり、知覚領域と高次認識領域の全ての要素が対応しておらず、従って、「フレームぐるみの拡張」とはいえない。しかし、聴覚領域と高次認識領域における要素を見ると、その意味の拡張は不規則に行われているとも考えられないため、聴覚領域から高次認識領域への拡張にも、個々の要素間ではなく、フレーム間の関係（ここでは、類と種の関係）を認めることができる。

最後に、「鼻」の嗅覚行為から高次認識行為への拡張を見てみよう。「目」や「耳」と同様、「鼻」は、以下の例のように、嗅覚器官を通しての知覚行為だけでなく、高次認識行為に関わる意味も表す。

- (19) 学校に戻って芳枝さんのいるところに向かう。そこで監視のお仕事を手伝って近くのおそば屋さんに向かう。なぜかわかんないけど、鼻が良いらしく洋平が合流。

(<http://www.nn.ij4u.or.jp/~undo/Tokyo3.htm>)

(19) の例は、波線部分で「なぜかわかんないけど」と述べられているように、「洋平」が、実際に嗅覚器官を通して「そば」や話者の匂いを知覚してそば屋にいる話者に合流したのではなく、話者の普段の行動や人から得た情報などを基に話者の居場所を判断して合流したことを表している。従って、(19) の「鼻が良い」の「鼻」は、(11) の「鼻がいい」の「鼻」が表す単なる知覚能力ではなく、高次認識行為における〈鑑識力・判断力〉を表していると考えられる。つまりこの例では、高次認識行為における〈道具〉を表す形式「鼻」を用いて、その行為に要求される〈能力〉（つまり〈鑑識力・判断力〉）を表しているのである。従って、(19) の「鼻が良い」では、〈鑑識力・判断力〉を表す「鼻」と、およそ〈優れている〉さまを表す「良い」が連結して、句全体で〈鑑識力・判断力が優れている〉さまを表しているといえる。

さて、(16) の「耳が肥える」と(19) の「鼻が良い」を比較すると、(16) の高次認識行為が聴覚を介して行われているため、シネクドキーによる知覚から高次認識への拡張であるのに対して、(19) は嗅覚情報を介してはおらず、嗅覚による知覚行為と、(19) の高次認識行為は異なるものであり、従って、(19) の「鼻」の意味は、異なる領域間の類似性に基づくメタファーによって生じたものである。

以下の図8は、この「鼻」の、嗅覚行為から高次認識行為への拡張を示したものである。

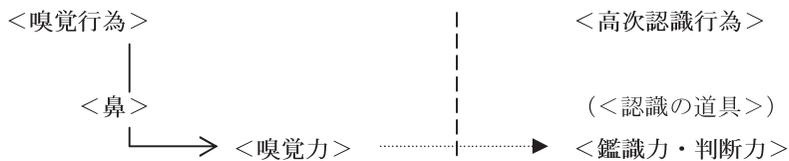


図8. 嗅覚行為から高次認識行為への拡張 (cf. 図4)

破線の左側は、図4で示した嗅覚行為のフレームの要素であり、右側は、そこから点線の矢印で示されるメタファーによって生じた、高次認識行為のフレームの要素である。二つの行為のフレームにおける〈能力〉は対応関係にあり、ここでも、図6の「目」の場合と同様、嗅覚領域から高次認識領域へ、フレームぐるみで意味が拡張していると考えられる。

以上のように、知覚行為の道具である身体部位を表す「目」、「耳」、「鼻」は、図2から図4で示されるように、知覚行為のフレームにおける別の要素をメトニミーによって表し、さらにこれら三語は、総合的判断や評価などの高次認識行為の道具として、図6から図8で示されるように、メタファーあるいはシネクドキーを介して高次認識行為フレームの別の要素を表すこともできる。また、この知覚行為のフレームから高次認識行為のフレームへの拡張は、田中（2002b）の主張するようにフレームぐるみで生じるものであり、このフレームぐるみの拡張は、「目」だけでなく「鼻」にもあてはまる。また、「耳」に関しては、フレームぐるみで拡張しているとはいえないが、フレーム同士に類種関係を認めることができる。

さて、慣用的連結句における「目」、「耳」、「鼻」の意味拡張を比較すると、それぞれの部位が関わる知覚器官としての性質が、意味の拡張に影響していることが分かる。まず、知覚における方向性に関する以下の図を見てみよう。

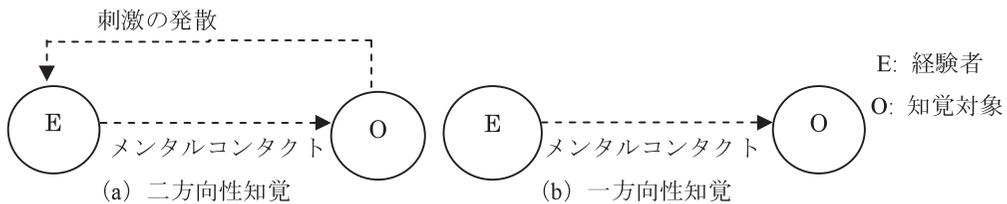


図9. 谷口（2005: 219）

谷口（2005: 217-200）は、嗅覚・聴覚などのように明確な刺激の発散を含むものを図9の（a）のような「二方向性知覚」とし、明確な刺激を含まない視覚・味覚・触覚などの知覚を図9の（b）に示されるような「一方向性知覚」としている。ここで、以下の例を見てみよう。

- (20) 加齢現象を考えると、大きな変化の表れる「見た目」を1つの指標とし、研究、検討することを目的として活動を進めていく。(= (3))
- (21) BMI22がもっとも健康的って世界保健機関が言っているのに耳を聞く事は出来ないのかな (= (17))

(20) の「見た目」の「目」は〈対象（の外見）〉を表し、「目」も「耳」と同様、〈対象〉に関わる意味を表している。しかし、これを田中（2001: 69）は、「完全に対象側だけに焦点を絞った概念ではなく、主体が抱く視覚印象から導き出される対象概念」であり、「主体側から対象側への焦点移動のプロセスを示すもの」であると説明している。一方(21)の「耳を聞く」の「耳」は、主体の聴覚印象から導き出される対象概念を表しているのではなく、完全に対象側に焦点が絞られている。このように、「耳」が認識対象自体を表す意味へと拡張している一方で、「目」が、対象そのものではなく、〈対象（の外見）〉という、主体の視覚印象から導き出される対象の特定の側面を表すのは、図9に示されるような、知覚の方向性を反映した結果であると考えられる。つまり、聴覚行為は知覚対象の働きかけ（刺激の発散）が積極的に関わるという点で、そこから拡張した高次認識行為における〈対象〉への拡張が行われやすく、それにより、「耳を聞く」の「耳」

は、聴覚を基に行われる高次認識行為の〈対象〉である〈話〉の意味を表すことができる。一方で、視覚行為は知覚対象からの刺激の発散に起因しない一方性知覚であることから、知覚対象そのものを表すことはなく、知覚対象に関わる意味を表すとしても、それは主体からの働きかけ（メンタルコンタクト）が関与する〈対象（の外見）〉を表すのである。

また、「目」は、「一目」や「見た目」において表される〈視覚行為〉と〈視覚対象（の外見）〉の意味を含めると、「耳」、「鼻」と比較して、知覚行為と高次認識行為のフレームにおいて表される要素が多い。これは、「目」の意味が知覚行為と高次認識行為のフレームにおける〈行為〉、〈能力〉、〈領域〉の他、「耳」と「鼻」が表さない〈方法〉と〈生産物〉の意味へと拡張しているためである。これも、上述の知覚の性質を反映した結果であろう。つまり、聴覚行為や嗅覚行為は一般に、対象の刺激に起因する受容的側面を持ち、それに対して視覚行為は、多くの視覚対象の中から意識的且つ容易に一つのものを選択（焦点化）したり、一方の対象から他方の対象へ視線を移動させたりするような、能動的側面が顕著である¹⁰⁾。このような視覚行為の能動的性質により、視覚行為の道具である「目」の意味は、能動的行為に要求される〈方法〉と、それが生み出す〈生産物〉の意味へと拡張するのである。以上のように、知覚を司る部位を表す語の意味拡張は、知覚の性質（知覚対象との関わりや、それに関連する能動性・受容性）に制約を受けていると結論付けられる。

3. おわりに

本稿では、身体部位詞の意味拡張の主要な基盤として「行為のフレーム」を設定し、実際に、「目」、「耳」、「鼻」の意味がそれに基づいてどのように拡張しているかについて検討してきた。これらの意味の拡張は、身体を何らかの行為をする際の道具として捉えることに端を発しており、各身体部位が喚起するそれぞれの典型行為（典型機能）によって、身体部位詞が関わる〈行為〉が特定されながら、それに関わる多様な要素が〈道具〉である身体部位詞によって表されている。三語の中でも特に、対象の認知において顕著な役割を果たす「目」は、他の二語と比較して、行為のフレーム内の多様な要素を表し、また、それぞれの意味を表す語を含む表現の数も多い。

しかし、もちろん、行為のフレームに基づくメトニミーによる意味拡張では、〈道具〉が常に参照点として働くのではない。2.1の先行研究で(1b)に挙げた *to author a book* という表現では、〈執筆する〉ことを表す *author* は本来、執筆行為のフレームにおける〈行為者〉を表す語であり、従ってこの例におけるメトニミーの参照点は〈行為者〉である。同様に、*give me one bite* という表現では、〈行為〉自体を参照点として、噛む行為の〈対象〉を表している。このように、同一フレーム内の要素であれば、当該のメトニミー表現が用いられる状況や行為の種類に起因する各要素の際立ちの高低差はあるが、そのどれもが同等に参照点となりうる。それにもかかわらず、身体部位詞が、それに関する行為のフレームの諸要素を表す際に参照点となりうるのは、当該の行為において特に〈道具〉が重視されるためというよりは、身体部位が我々にとって非常に際立ちの高いものであるためであろう¹¹⁾。

注記

- 1) 本稿では、言語表現の意味や概念を〈...〉で表記する。
- 2) ICMとは、Lakoff (1982) が提案している理想化認知モデル (idealized cognitive model) であり、これは Fillmore の提案するフレームの類似概念である。両者は、言語表現と結びついた、背景的知識構造であるという点で共通している。なお、Lakoff は当初この ICM をカテゴリーにおけるメンバー間の関係 (プロトタイプ効果) を有効に説明する概念として挙げているため、本稿では、単に語の背景的知識の総体を示す際には Fillmore のフレームという用語を援用する。
- 3) ここで挙げる action ICM と perception ICM に基づくメトニミーは、同一 ICM 内においてある要素が別の要素を表すというものだが、Kövecses and Radden (1998) では、ICM 全体 (カテゴリー) によってその要素 (メンバー) を表す (あるいはその逆) 関係もメトニミーを生じさせるとしている。筆者はこのような種類関係に基づく認知プロセスをメトニミーではなくシネドキーと考えるため、Kövecses and Radden (1998) の主張とは異なるが、この問題については本稿と直接関わらないため、ここでは割愛する。
- 4) 身体部位詞は、日本語だけでなく、英語 (Kövecses and Radden 1998, Kövecses and Szabó 1996, 秋元 1992, 秋元 1994, 寺澤他 1999 など)、フランス語 (秋元 1994)、ドイツ語 (秋元 1994) 中国語 (Yu 2003) などでも分析されている。これらの研究では、身体部位詞の意味が行為のフレームに基づくメトニミーによって拡張しているとは述べられていないが、拡張した意味についての記述を見る限り、それらは行為のフレームに基づくメトニミーによって説明でき、また、この拡張のプロセスは異言語間である程度共通している。
- 5) 西村 (2002: 292) は、メトニミー表現の意味の成立の多くに Langacker の主張する参照点能力が関与していることは認めながら、もう一つの要因として、単一フレーム内の焦点移動という認知能力が関わっていると論じ、メトニミーを、「ある言語表現の複数の用法が、単一の共有フレームを喚起しつつ、そのフレーム内の互いに異なる局面ないし段階を焦点化する現象 (西村 2002: 299)」であると述べている。
- 6) 「目で見る」は、それだけで用いられることはなく、(5) の点線部の「救いを求めるような」や、他に「冷たい」、「温かい」など、特定の様態を表す修飾要素を伴って用いられる。
- 7) 「目に入る」の「目」を〈視界〉としない分析については松本 (2004) を参照。
- 8) Lakoff and Johnson (1980: 48) は、I see what your'e saying (〈君の言っていることは分かる〉) や I view it differently (〈私はそれを違ったふうに解釈している〉) などの例を用いて、UNDERSTANDING IS SEEING という概念メタファーが存在すること主張している。なお、同様の概念メタファーについて、Sweetser (1990)、Kövecses (2002) などは、KNOWING IS SEEING と表記している。
- 9) 「憂き耳を聞く」(〈心の痛む話を聞く〉)、「好い耳を聞く」(〈よい話を聞く〉) のように、「耳」が修飾要素を伴って用いられることもある。
- 10) ただし、視覚が完全に能動的であり、聴覚と嗅覚が完全に受容的であるとはいえない。高嶋 (2007) は、Lakoff (1993) が主張する、知覚主体には、意図的で能動的に情報を得る行為者 (Agent) としての側面と、受動的に情報を受け取る着点 (Goal) や被動作主 (Patient) としての側面を持つ、という議論を基に、「見る」と「聞く」の意味拡張における二面性について分析している。そこでは、「見る」の受容的側面から拡張した例として、〈経験する〉ことを表す「泣きをみる」が挙げられ、「聞く」の能動的側面から拡張した例として、〈質問する〉ことを表す「先生に誕生日を聞いた」が挙げられている。このように、知覚は、程度の差はあるが、能動的知覚と受容的知覚の両側面を持っている。
- 11) このことは、「首」自体が〈免職〉の意味を担う「首に{する/なる}」という表現からも分かる。この場合の「首」の意味は、誡首行為の〈対象〉である身体部位を表す形式で、その〈行為〉(つまり、〈誡首行為〉) 自体の意味を表し、そこからさらに類似性に基づくメタファーによって、〈免職行為〉の意味へと拡張して

いる。この例では、身体部位は行為のフレームにおける〈道具〉ではなく〈対象〉であるが、それでも身体部位が参照点として用いられている。ただし、「筆が立つ」のような例では、直接対象に働きかける〈道具〉としての筆と、それを操作するために用いられる、間接的な〈道具〉としての手や指が考えられるが、この場合は、身体部位ではなく、直接的な〈道具〉（筆）を表す形式によって、〈書くこと〉という行為自体を表している。従って、行為の種類によっては、たとえそれが身体部位によって操作されるものであっても、より直接的な道具が参照点となることもあり、人間が行う行為のフレームにおいて、必ずしも身体部位が参照点になるとは限らない。

参考文献

- Croft, W. 1993. "The role of domains in the interpretation metaphors and metonymies." *Cognitive Linguistics* 4: 335-370.
- Fillmore, C. J. 1982. "Frame Semantics." In The Linguistic Society of Korea (Ed.), *Linguistics in the Morning Calm*. Pp. 111-138. Seoul: Hanshin Publishing C.
- Gibbs, R. W. 1994. *The Poetics of Mind*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kövecses, Z. 2002. *Metaphor, a Practical Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Kövecses, Z. and G. Radden. 1998. "Metonymy: Developing a cognitive linguistic view." *Cognitive Linguistics* 9-1: 37-77.
- Kövecses, Z. and P. Szabó. 1996. "Idioms: A view from cognitive semantics." *Applied Linguistics* 17: 326-355.
- Lakoff, G. 1982. "Categories: An Essay in Cognitive Linguistics." In The Linguistic Society of Korea (Eds.), *Linguistics in the Morning Calm Selected Papers from SICOL-1981*. Pp. 139-193. Seoul: Hanshin publishing Company.
- . 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things. What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- . 1993. "Contemporary Theory of Metaphor." In Ortony, A. (Ed.), *Metaphor and Thought* (2nd. Ed.). Pp. 202-251. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Turner. 1989. *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. 1993. "Reference-point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4: 1-38.
- . 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yu, Ning. 2003. "The bodily dimension of meaning in Chinese: what do we do and mean with "hands"?" In Casad, E. and G. Palmer (Eds.), *Cognitive Linguistics and non-Indo-European Languages*. Pp. 337-362. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 有蘭智美. 2009. 『身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の認知言語学的研究』, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, 博士学位論文.
- 秋元実治. 1992. 「日・英語に見られる 'Idiomatcity'—プロトタイプとの関係で—」『青山学院大学総合研究所人文学系研究センター研究叢書』 Pp. 1-28.
- . 1994. 「イディオムのタイプロジー的研究—日・英・仏・独語を中心に—」『青山学院大学総合研究所人文学系研究センター研究叢書』 Pp. 1-30.

行為のフレームに基づく「目」、「耳」、「鼻」の意味拡張

- 高島由布子. 2007. 「知覚表現における感覚モダリティの身体性と主観化—知覚動詞「見る」「聞く」の意味拡張と多義構造—」名古屋大学国際言語文化研究科日本語文化専攻現代日本語学研究会（口頭発表）.
- 田中聡子. 2001. 「「目」の多義分析—フレームと比喩複合—」『言葉と文化』2: 61-78. 名古屋大学国際言語文化研究科.
- . 2002a. 「「口」の慣用表現—メタファーとメトニミーの相互作用—」『言葉と文化』3: 5-20. 名古屋大学国際言語文化研究科.
- . 2002b. 「視覚表現に見る視覚から高次認識への連続性—視覚の文化モデル—」『言語文化論集』23-2: 155-170. 名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科.
- 谷口一美. 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』東京：ひつじ書房.
- 寺澤芳雄他. 1999. 「日・英慣用表現の対照研究(2) —日本語における身体語彙感情表現」『東京女子大学比較文化研究所紀要』60: 36-5.
- 西村義樹. 2002. 「換喩と文法現象」西村義樹（編）『認知言語学 I：事象構造』Pp. 285-311. 東京：東京大学出版会.
- 松本曜. 2004. 「日本語の視覚動詞における虚構移動」『日本語文法』4-1: 111-128.

用例出典

用例について、引用例がインターネット上に公開されているホームページからの引用である場合、例文後の（ ）内に引用先の URL を示した（検索エンジン：<http://www.google.co.jp/> 検索時期：2013.7.23～2013.8.10）。また、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）からの引用例の場合には、例文後の（ ）内に作者及び作品名を示した。